H27. 1. 24

Dr. 和の町医者日記

「生と死」シリーズ⑤

大スターの最期に学ぶ

健さんと文太さんの生き方、逝き方

昨年末、日本映画界を代表する大スターが2人相次いで旅立たれた。高倉健さんと菅原文太さん。私はどちらも大ファンだが、お二人の闘病生活と最期の様子を振り返ってみたい。

健さんは、まだお元気な時、理想の死のイメージを「カリブ海に潜ったまま上がってこない」と語っていた。現実には、平成21年に前立腺がんで手術を受けて寛解したものの、その経過観察中に悪性リンパ腫が発見され、療養されていた。

亡くなられたのは病院のベッドの上だったが、詳細は明らかにされていない。常に人に心配をかけないためプライベートを明かさない昭和の映画スターの逝き方に最も適した場所が、病院であったのだろう。

健さんは誰に対しても非常に謙虚で、極めて礼儀正しい人だった。撮影現場では、現場を支えてくれているスタッフたちを思い、一切座ることがなかったという話も有名だ。「俳優は肉体労働」と、筋トレやジョギングも欠かさなかった。ご縁を大切にされる人で、大阿闍梨の酒井雄哉氏との親交も伝えられている。酒井さんから頂いた言葉「往く道は精進にして、忍びて終わり悔いなし」が、健さんからの最期のメッセージとして伝えられた。この言葉にこそ、健さんの生き方、逝き方が凝縮されているような気がしてならない。

一方、菅原文太さんは21年に俳優を引退されてからは、山梨県で農業を始められた。東日本大震災以降は復興支援にもご尽力された。19年にステージⅡのぼうこうがんが発見され、10人の専門医に治療法を聞いて回ったところ9人がぼうこう全摘を勧めたという。全摘しなければ余命半年とのことだったが、10人目の医者だけが、ぼうこうを温存して放射線治療のひとつである陽子線治療でいこうと提案し、文太さんはぼうこうを温存する選択をされた。

その理由が、ぼうこうを全摘したら「立ちションができなくなる」から。最期はぼうこうがんが肝臓に転移し、肝不全だったという。余命半年といわれてから7年生きたので、文太さんは納得、満足されていた。私は今月18日のフジテレビ「新・報道２００１」に生出演したときに、その選択について「文太さんに一番大切なＱＯＬ（生活の質）とは立ちションだったが、それで良かった。大正解」と言った。

2人の大スターの人生の最終章について考えてみたい。お二人とも、がんを患った。現在、日本人の2人に1人ががんにかかる。がんはまさに国民病だ。長生きすればするほど、がんになる確率が高まる。

どちらもがん治療に際し、自分自身の生き方に寄り添ってくれる医師を探し求め、納得のいくがん治療を受けられた。だから、病を宣告されてからも体が許す限り仕事や社会活動を続け、人々に勇気や希望や感動を与え続けることができた。

健さんは83歳、文太さんは81歳と、日本人男性の平均寿命を越えて長生きされた。芸能界には不規則な生活やストレスで早世される方も多いが、お二人の長寿の理由は自己管理を徹底していたからではないか。

私は今年57歳。仮に80歳くらいまで生きるとして、残された時間はあと20年。人生の最終章を迎えたとき、果たして「往く道は精進にして、忍びて終わり悔いなし」と言えるだろうか。大スターの訃報に接して、自分自身の生き方、逝き方をイメージしはじめている。

長尾和宏（ながお・かずひろ）
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで〝人を診る〟総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学、東京医科大学客員教授。56歳。

酒井雄哉・大阿闍梨（だいあじゃり） 比叡山延暦寺の天台宗の僧侶。壮絶な修行を千日続ける千日回峰業を昭和55年、62年と、2度満行し、大阿闍梨となった。大阿闍梨は千年の歴史の中で酒井さんを含めて3人しかいない。平成25年9月に亡くなった。

ひょうご